

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730416

研究課題名(和文) 周縁地域での内発的地域づくりの可能性 アートプロジェクトによる景観創造に注目して

研究課題名(英文) The Potential of Spontaneous Community Renovation in the Surrounding Areas -  
Focusing on the Landscape Creation by the Art Projects

## 研究代表者

宮本 結佳 (MIYAMOTO, YUKA)

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：00610239

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本においては近年、周縁地域で地域の歴史・生活を取り込んだ現代アートプロジェクトが展開しており、地域づくりや地域再生の観点から、そうした現代アートプロジェクトを媒介とした新たな景観創造の試みがどのような可能性を持つものなのかを探究することが、課題となってきた。本研究では、日本の周縁地域における現代アートを媒介とした景観創造活動の分析を通じて、アートプロジェクトによる地域固有資源を活用した内発的地域づくりの可能性を考察した。

研究成果の概要(英文)：In recent years in Japan, modern art projects incorporating the local histories and lives in the surrounding areas have been developed, which brought out a challenge of studying what potentials the new approaches for landscape creation through the modern art projects have from the perspective of community renovation and revitalization. This study, through the analysis of landscape creation activities through the modern art in the surrounding areas in Japan, examined the potential of spontaneous community renovation utilizing the regional unique resources by the art projects.

研究分野：社会学

キーワード：瀬戸内国際芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 景観 アート 記憶

### 1. 研究開始当初の背景

近年、地域再生という課題においては、景観等地域の固有資源の活用的重要性が指摘されてきた。しかし、観光といった観点から景観を考える時、「外部者のまなざしにより場所が消費される」という問題点が指摘されてきた。外部者のまなざしに応えようとするモメントが強くなり、結果として画一化された景観が各地に複製されるという問題が秋津元輝氏らにより提示されてきた。

日本においては1990年代後半以降、周縁地域で地域の歴史・生活を取り込んだ現代アートプロジェクトが展開しており、地域づくりや地域再生の観点から、そうした現代アートプロジェクトを媒介とした新たな景観創造の試みがどのような可能性を持つものなのかを探究することが、大きな課題となってきた。

### 2. 研究の目的

本研究では、日本の周縁地域で展開するアートプロジェクトが「(外部からの景観へのまなざしに応えようとした結果)景観の画一化が発生してしまう」という問題点を克服し、地域社会再生のために果たす役割について検討する。

そして、日本の周縁地域における現代アートを媒介とした景観創造活動の分析を通じて、アートプロジェクトによる地域固有資源を活用した内発的地域づくりの可能性を考察する。

### 3. 研究の方法

近年、地域社会を分析対象とする研究において、「地域再生」に対する関心が高まりを見せており、経済学等社会学に隣接する分野でもその重要性が提起されている。諸富徹氏の研究をはじめとして、文化芸術による地域再生に関する研究も行われているが、具体的な分析の中心は、経済効果などのマクロな構造の問題に重点が置かれている。メゾ・ミクロのレベルにおける多様なアクター間の相互作用の分析を行うことが喫緊の課題であると言えるだろう。

アートプロジェクトの展開における、アクター間の関係性の蓄積、創出のダイナミズムは時に従来から地域に存在する社会関係の深化、再形成として立ち現れることもある。また時に全く異なるアクターの参入を受け新たなネットワークが構築される場合もある。

アートプロジェクトを機軸とした地域再生の可能性を考えるにあたっては、メゾ・ミクロレベルにおける組織・各アクターの分析を行うことが必要不可欠である。よって、本研究では、フィールドワークを通じてメゾ・ミクロレベルでの分析を行う。

具体的には、アートプロジェクトを媒介と

した景観創造活動が実践されている新潟県越後妻有および瀬戸内海の島嶼部における調査を実施する。

フィールドワークに先立ち、文献・資料収集をはじめとする調査準備を実施した上でアートプロジェクトにかかわる地域住民および住民組織、行政、作家、来訪者等へのインタビューを中心とした調査を行う。

### 4. 研究成果

(1)越後妻有アートトリエンナーレの実施される新潟県十日町市松之山エリア(旧松之山町)上鰈池集落において調査を行った。

上鰈池集落の複数の住民、および上鰈池集落において作品制作を実施した作家に対しインタビューを実施した。

上鰈池集落において制作、展開された「上鰈池名画館」の取り組みについて、調査を実施した。「上鰈池名画館」においては写真作品の制作・展示、ミュージアムショップの運営がなされた。

本研究ではインタビュー調査を通じて、作品において人と場所の関係性のどの部分がいかに描かれてきたのかを検討した。

調査の中で西洋の名画をモチーフとして生業・余暇をめぐる生活景が描き出される過程と作品に対する住民の語りを詳しく見ていくことを通じて、住民が作品にどのような意味を見出しているのかを確認した。

作品に対する住民の語りから、彼ら・彼女らは作品に集落内の密なコミュニケーションの表出を読み取っており、それを評価していることがわかった。

また、写真作品には棚田などいわゆる目に見える文化的景観が随所に描かれている。コミュニケーションのあり方と(共同性の保持を通じて維持されてきた)可視的な文化的景観が同時に作中に表現されたことで、住民間に密なコミュニケーションを基盤として成立する生活景という作品に対する「物語」が共有されたと考えられる。

そして、ミュージアムショップにおける写真作品を飛び出したモノの販売にも注目して検討を行った。

上鰈池名画館では、集落で当たり前につくられていたり、使われていたりしているモノが写真作品中に登場した。そして同時にそのモノたちは写真作品を飛び出してミュージアムショップに現れた。写真作品とミュージアムショップという仕掛けを組み合わせることで、これまであたり前にそこにあったモノが来訪者にとって新たな魅力ある商品となっていくことがわかった。

上記(1)の内容は後述する雑誌論文「アートの地域づくりにおいて「地域の文脈」が果

たす役割：作品における生活景の表出に注目して」として発表した。

(2)瀬戸内国際芸術祭の実施される香川県高松市大島において調査を行った。

香川県高松市大島にあるハンセン病療養所大島青松園の複数の入所者、および大島においてアートプロジェクトを実施した作家達に対してインタビューを実施した。

大島にあるハンセン病療養所大島青松園において、やさしい美術プロジェクトによって展開された「つながりの家」の活動について調査を実施した。

「つながりの家」の活動の中でも大島を味わうことをテーマとしたカフェ「カフェシヨル」を中心に調査を実施した。

カフェシヨルにおいては、療養所内の加工部で製造されていた菓子「ろっぽうやき」の復刻をはじめとして、入所者による食をめぐる実践が取り上げられた。

近年、多様な建造物群や自然景観、歴史的景観を保存し、広く公開しようとする動きが活発化しており、その中でも特に戦争、災害、公害、差別といった否定的記憶を伝承する負の歴史的遺産への関心が高まっている。歴史的遺産の中には多様な要素が含みこまれており、その中のどこに光を当てるのかを争点とする議論が活発化している。

この議論について、差別をめぐる負の歴史的遺産であるハンセン病療養所大島青松園の調査を通じて明らかになったのは次の点である。

ハンセン病療養所大島青松園におけるカフェシヨルにおける取り組みの分析を通じ、そこでは食をめぐる複数の生活実践が巧みに表象されており、従来捨象されがちであった入所者の多様な経験が継承されていることが明らかになった。

さらに、カフェシヨルの取り組みの分析を通じて、入所者たちが存命であり、自らの経験・意味づけを語る事が可能な現時点において、入所者自身が自らの生きてきた時間をどのように捉え、それをどのように伝えようとしているのかを残すことが可能となっているということが明らかになった。

シヨルの取り組みを通じて保存の営みがなされた時点(=入所者たちが存命で、語ることが可能な現時点)における入所者たちの価値観がハンセン病療養所という歴史的遺産に含みこまれたということができる。

高齢化が進む中で、将来的には入所者がいなくなる時期が到来するが、食をめぐる生活実践の伝承の中に、入所者たちの経験・価値観は保存されていくことになる。

上記(2)の内容は後述する雑誌論文「負の歴史的遺産における生活実践の伝承可能性

-ハンセン病療養所におけるアートプロジェクトを事例として-」として発表した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

・宮本結佳,2012,「住民の認識転換を通じた地域表象の創出過程 - 香川県直島におけるアートプロジェクトを事例にして -」『社会学評論』63(3),391-407.[査読有]

・宮本結佳,2014,「アートの地域づくりにおいて「地域の文脈」が果たす役割:作品における生活景の表出に注目して」『彦根論叢』400,106-119.[査読無]

・宮本結佳,2015,「負の歴史的遺産における生活実践の伝承可能性 - ハンセン病療養所におけるアートプロジェクトを事例として -」『環境社会学研究』21,41-55.[査読有]

[学会発表](計3件)

・宮本結佳,「住民の認識転換を通じた地域表象の創出過程 - 香川県直島におけるアートプロジェクトを事例にして -」瀬戸内海研究会「瀬戸内海固有の景観資源の保全と活用に関する調査研究」第一回研究会,2013年3月27日,於オーキドホテル会議室

・宮本結佳,「歴史の伝承におけるアートの役割 - その可能性と課題」2013年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所空間における 生環境 をめぐる実証研究」研究会,2014年3月30日,於国立療養所大島青松園

・宮本結佳,「負の歴史的遺産における生活実践の伝承可能性 - ハンセン病療養所におけるアートプロジェクトを事例として -」瀬戸内海研究会議フォーラム in 奈良,2015年9月3日,於奈良県文化会館

[図書](計 件)

[産業財産権]  
出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮本 結佳 (MIYAMOTO, Yuka)  
滋賀大学・教育学部・准教授  
研究者番号：00610239

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：